

山形大学附属博物館報13

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY 1987. 3. 1

目次

インデアンの頭	(1)
最上川あれこれ	(3)
資料紹介	(4)
お知らせ	(6)

インデアンの頭

石川喜一

山形大学附属博物館が、山形大学附属図書館の三階にあり、資料展示室、古文書収蔵室、資料収蔵室、事務管理室など約400mを占め、約3,000点もの展示物があり、かつ毎年いろいろな公開講座や催しをやって、活発に活動しているということを私が認識するようになったのは、恥ずかしいことに、つい数年前のことである。

昭和47年の秋、医学部創設準備室の先生方の要請で、医学部教授予定者の全員が、小白川の山形大学附属図書館の三階にある会議室に集まり、医学部や医学部附属病院の建築や医学教育の将来構想について相談する会議を数回持った。そのとき、附属図書館の階段を上って、三階の廊下を通ると、通路の片側に土器のかけらや古い織機、そして年輪を示すための木材の輪切りにしたものがいくつか置いてあるのを見て、これは一体なんだろうと首をひねったものだった。その後、山形大学に着任して教授会における諸会議の報告などで、附属博物館運営委員会の報告を聞くたびに、ボンヤリと附属博物館はいったいどこにあるんだろうと思いつながら、霞城公園にある県立博物館を頭に浮かべて聞くことが多かった。つまり、山形大学にも小白川地区のどこかに博物館の建物があって何か展示しているのだらうといったくらい気持ちだったのである。ところが、数年前に博物館運営委員会の医学部委員を命ぜられて、運営委員会終了後に初めてその実態を詳しく見せていただい

た。そのとき、独自の建物を持たなくて図書館の一角を使用していることに少々奇異の感を持ったことと、意外と(失礼/)面白いものが展示(本格的な展示ではないが)されているのを見て『ホッ』と目を見張ったものだった。そして年間約1,400人しか見に来ないと知って、勿体ないな、と思ったものである。

大学附属博物館という私にはある思い出がある。いまから20数年前、私はボストンにいた。それまで新潟以外の場所には住んだことのない私の目にはボストンの風物はすべて珍しく、また留学先のハーバード大学のすばらしさにびっくりしたものだ。ハーバード大学理学部はケンブリッジ市にあって特別なシンポジウムやゼミナールなどがあるとよく出掛けたものだったが、そこにはハーバード大学附属博物館があった。この博物館はその展示物の豊富なこともさることなが



ハーバード大学のUniversity Museum内
Botanical Museumのガラス展示物

らガラスで作られたいろいろの花や種子とその断面標本、いろいろな植物のガラス製標本がびっくりするほどたくさん展示されていた。その素晴らしさは本物の植物と見紛う程であった。しかし、大きさからいって本物である筈がないと思ひ、だからこれはガラスなのだ納得するような出来栄であった。ウロ覚えであるが、この標本はたしか理学部において教材として使うため今世紀初頭に作られたもので、このコレクションが基礎になって、そのほかにいろいろなものを集めて展示することによって博物館となったのだということであった。何日見て回っても見飽きないほどの展示物があった。一度この博物館にencharmされると、何か機会がある度にこの博物館を訪れることとなった。一番いい機会には日本からボストンを訪ねられた方に、ハーバード大学を案内する時であった。案内をそっちのけで博物館の展示物に見入っていたことを懐かしく思い出す。こんなにも自然は美しく、こんなにも自然は素晴らしい、ということをごく自然に教えてくれたように思う。人文科学的、民俗学的な展示や、考古学的な展示は少なかつたような気がするが、自然科学的な展示は素晴らしい。丁度その頃、日本に帰ったら臨床に行こうかどうしようか迷っていた私は、だんだん自然科学を一生の仕事にできれば、と思うようになったようである。そのentranceの前には犀か鹿馬かの大きな青銅の像があった。そこに入る時のワクワクした気持ちとそこから出てくる時の満足感は今でも覚えている。

自然科学的な展示が多かったが、民俗学的な展示も充実していた。アメリカらしくアメリカインディアンの生活とその遺産に関する部屋がいくつかあった。ある時、一つの部屋から出ようとして壁にかかっている多くのインディアンの民具の中に、異様なものがぶらさがっているのを見た。何だろうと思って近づいて見るとそれはインディアンの首であった。五つか六つだったと思う。大きさは私の拳くらいでわくちやではあっても確かに人間の首であった。一瞬「ウツ」となったが『ハテナ』と首をひねった。人間の首がこんなに小さくなるはずがないからである。けれども説明を聞いて納得した。頭蓋骨は丁寧に首の切断面から取り去って軟部組織だけにしたあとミイラ化したのだった。大きさからいうと10分の1程度になったのだから、私は人間の軟部組織が80%以上水分からできてい

ることを実感したものだ。髪の毛はほとんど縮小しないのでそれを束ねてぶら下げているのでそのバランスがなんと奇異な感じだった。首狩り族(アメリカインディアンにもいたのだとは知らなかった)が持っているものだそうであった。

附属博物館は大学の顔、いや頭なのだということを感じるようになったのはそれからである。博物館という何か現代と全く関係のない考古学的資料や、民俗学的資料を展示してあるところで学生諸君には特に興味のないところと考えられがちである。それは展示物がそうなのと博物館を充実するには莫大な予算が必要で現時点ではまったく期待できないが、私は山形大学附属博物館がもう少し皆に見てもらえるような展示が出来るようになってほしいと思う。学生諸君にも見に来て欲しいと思う。それなりに、いろいろ感ずるところもあると思う。



アテネのギリシャ国立博物館にて

今年の5月に学会出張でギリシャに行った時、アテネの国立博物館を見学する機会を得てその素晴らしさに感激した。時間の関係で足早に見てあるく私の前に、生後まだ2~3ヶ月の赤ちゃんを抱いた若い婦人が熱心に見入っている姿があった。そこには博物館が皆のものという感じがあった。博物館というのはこういうものなのだと思うされたシーンではあった。山形大学では何時こうなるだろうか。

(医学部 教授
博物館運営委員会委員長)

最上川あれこれ

加藤 武雄

最上川は、流域面積から見ると、わが国第8位で7,040㎢を占め、東北地方では北上川に次ぐ大きな河川である。しかし、最上川は山形県という一つの県内だけを流れる河川——1県1河——として珍しい。この種の河川に限ると、最上川は全国でもっとも長い(226km)河川になる。また、この流域は山形県全体(9,326㎢)の約3/4に当たり、そこには山形県総人口の約80%(約100万人)が住んでいる。したがって、最上川は県民の生活と密着し、山形県の歴史は、そのままこの川に映像されるといって、すこしも過言ではなからう。このように、最上川は山形県の「母なる川」と呼ばれるにふさわしい性格をもつ。天皇がかつて県内を巡幸されて、「広き野を流れゆけども最上川海に入るまで濁らざりけり」と詠われたが、近年そのまま山形県民歌に選ばれたのも宜らかなといいたい。歴史の流れとともに、最上川の水質汚濁が進み、当時の面影はうすれたが、未来への憧れを、この歌に託しておこう。

ところで、最上川の源はどこであろうか、これには二つの考えがある。一つは奥面川を最上川の本流とし、その上流部に当た大樽川をその源流とする。裏磐梯に抜ける吾妻スカイパレーラインの赤滝・黒滝展望台付近に、すでに最上川源流の標柱が建てられている。もう一つは、古くより置賜地方の人びとに親しまれている松川を最上川の本流とするもので、大平温泉の火礫滝上流の吾妻山をその源とする。二つとも吾妻火山地域に本源を考えるが、われわれにとっても関心もたれる。わたくしは、深い理由をべつに持たないが、流域住民の意識や慣習なども尊重して、松川説に同調している。建設省とおなじ考えである。しかし、建設省は、松川という呼び名まで捨てて、本流をまとめて最上川と呼ぶようにしたが、惜まれることである。

人間の社会で分家や嫁入りがあるように、最上川の場合にも、分水や他河川からの導水——流域変更——が行われている。かつて庄内地方の赤川は最上川の有力な支流であったが、その河口付近が度重なる洪水に見舞われていた。そのため、

大正10(1921)年より、酒田市黒森地内で砂丘を掘削して、赤川を最上川から分離して直接日本海に通水する工事が進められてきた。昭和28(1953)年に、これが完成して、現在では赤川は独立した一水系となっている。

これとは逆に、規模は小さいが、まったく別の水源から最上川に導水する工事もなされている。灌漑の必要上、農業用水堰を苦勞して掘削したものである。その一つは、上市市置平の横川堰で、舟引山(蔵王山系)の東側を流れる横川(阿武隈川水系)の水を分水嶺(舟引山)にトンネルを掘削して、須川の支流置平川に導くもので、明治14(1881)年に通水したといわれる。最上川への越境通水というわけである。もう一つは飯豊山地の穴堰といい、玉川の水を最上川水系の白川に導入するものである。この堰は文政元(1818)年に完成して、改修を加えながらも置賜盆地の灌漑に役立っていた。新潟地震によって導水トンネルが壊れたのは惜しまれてならない。この2例は、流域変更の上から面白く、水利史研究の上で好題材になりそうな気がする。

こんどは、話を最上川の流域の形に移していこう。その流域が独特の形をしており、上流から次のような順に、盆地と峡谷とが交替して現れる。



最上川の峡谷のうちで、自然・人文の両面から、地域を大きく区分する峡谷は五百川峡・蒜点峡・最上峡の三つで、これらによって山形県は、置賜地方・村山地方・最北地方・庄内地方の4ブロックに分けられている。よく見ると、最上川本流というのは、上掲の盆地どうしをつなぐパイプに相当するものといえる。これらの地方は、古くより峡谷の障壁にさえぎられていた関係で、土地利用にしても治山治水にしても、各地方が独立して、しかもたがいの連絡なしに行われていた。江戸時代には、それぞれの地方を上げ、最上、戸沢、酒井の大名が統治していたのである。いうまでもなく現在では、最上川を大局的に一つのシステムと考えて、行政が推進されている。

最上川の流域においては、地質時代から現在に

いたるまで、山地では隆起、盆地では沈降が続いているといわれる。したがって、米沢・山形・新庄などの諸盆地は沈降地域であるために、ここでは最上川の流送する砂礫を落す沈砂池のような役割を果している。つまり、峡谷では河床や谷壁が侵食されるが、その砂礫は流送されて次の盆地内に堆積してしまい、次の峡谷を越えて下流に移動することはほとんどない。このように最上川では、侵食、流送(運搬)、堆積という河川本来の作用が各ブロックごとに繰返されているのである。地理の初級の教科書で、わたくし達は、河川では上流で侵食作用、中流で流送作用、下流で堆積作用が行われると習ったが、最上川ではそのままでなく小さきみに進んでいるわけで単純ではない。このようなことから、最上川はわが国有数の大河川にちがいないものの、そこには利根川や信濃川のような堂々たる風格が現れない。いかにもつつましやかである。しかし、そのためにこそ、全流域にわたる豪雨におそわれても、局地的な水害に食い止められることが多く、大水害にいらすずにすんでいる。

山形県になかなか国を背負うような大人物が現れないが、必ずしも最上川の風土に左右されているからだけではなからう。(教育学部教授)

資料紹介

美術資料

本館には師範学校時代のものも含め、絵画89点、彫刻12点、書28点、刀剣10点など本県出身作家の作品を中心に、およそ200点の美術資料が収蔵されている。この中から昨年購入した2点について紹介したい。

日本画「城山と集落」

齊藤 二 良作 (20号)

作者は山形市長谷堂在任の画家であり、新興美術院に所属している。秋田専卒卒業後、教鞭を執る傍ら絵画を後藤紀一氏に師事し、新興美術院展において、文部大臣奨励賞、奨励賞3回、努力賞

などに入選して頭角を現わした。画題は郷土の自然に求め、民家、街道など庶民生活の息吹きのするものを多く描き好評を得ている。

当画は氏の日常親しんでいる長谷堂の集落と城山を描いたものである。

漆絵

「安南大森とつるうめもどき」

元・山形大学教授 佐藤 正 巳 作 (10号)

山形市平清水在住の漆工芸家である作者は、大正9年に天童市に生れ、東京美術学校卒業後、日展にしばしば入選し、特選1回、依頼出品2回などを経て、日展審査員もつとめた。昭和60年には斉藤茂吉文化賞を受賞、昭和61年3月まで本学美術科の教官をつとめた。

この作品は退官記念に山形市内のデパートで個展を催したときに出品されたものである。

漆絵とは顔料を漆で溶いて描いた、伝統的手法による絵画である。

歴史資料

小鞆鯛船(こうがいぶね)模型

全長：88cm 幅：21cm
 帆柱：50cm 材質：杉材
 製作者：木村成雄 (大石町黒滝)
 製作年：昭和53年
 寄贈者：茂木礼仁 (山形市緑町)

最上川水運の歴史を紐解くと、平安時代以前に溯るといふ。この時代は丸木舟や筏を用いた部分的な連絡であったと推定される。近世になると、天正8年(1580)頃から最上藩は藩米輸送のため、番点、三河の瀬、集の三難所の開削を始めた。また米沢藩内では元禄7年(1694)に、藩御用商人、京都の西村久左衛門によって五百川峡が開かれ、これらによって置賜盆地から酒田港までの約200kmにわたる水路が可能になったのである。

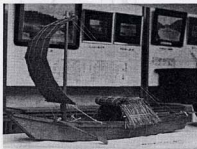
この頃活躍していた船は鯉船といって、大河川で用いられる比較的大型の船であった。小鞆鯛船とは江戸末期になってから登場する急流に対応した小型の船である。名称から鯛船に用いた船を連想するが、当時最上川で鯛船が行なわれていた記

録はなく、おそらく「航海船」あるいは「迂回船」に由来するのではないかと考えられる。

小輪船は全長14~16m、幅1.8m、吃水高50cm、積載量およそ2t（米30俵）、操舵員3名以下の比較的小型の輸送船である。楳船は大きなもので全長30m、幅2.5m、吃水高70cm、積載量20t余り（米350俵）、操舵員5名であるから、その規模の差は著しい。また小輪船は鋭角の軸先を持つことなど、その形状も異なっていた。そのため巡航速度、旋回性能などは楳船に比べ、大幅に優れたものであった。特に最上川の川船は、至る所に存在する急流など（いわゆる難所）で、多くの引き子を動力し更舟の形態をとって進まなければならなかったため、その軽便さはまさにこの河川に適したものであった。明治時代の記録によると、楳船で左沢——酒田間の往復に平均1ヵ月要したのに対し、小輪船では10日間余りで足りたという。また造船費用もおよそ4分の1であったから、小輪船の需要が高まったのも当然である。

しかし、明治5年までは最上川通船定法により、小輪船の航行は大石田より上流に限られていたため、それまでは楳船が大勢であった。そして新政府により最上川通船渡行自由の裁許が下り、それ以後小輪船は最上川水運の主流となった。だがこの水運の全盛も、昭和に入って陸上交通が発達すると共に、姿を消すことになる。

本資料は、当時を知る船大工の手に因るものであり、木組み、帆として用いられている藁葺の取り付け方など、小輪船の船体を忠実に再現したものである。



小輪船模型

以上の外に最近収集した資料は次のとおりである。民俗資料：田下駄、千歯、たたき棒、杵、唐箕、俵あみ器2点、獨台（以上、河北町谷地・奥山利一氏寄贈）。民俗資料：漁業用浮き玉、明治期の大工道具一式6点、小輪船船内用大鉢。歴史資料：仁地軌道軽便鉄道レール（以上、山形市・茂木礼二氏寄贈）。寄贈者並びに協力下さいました諸先生に深く御礼申し上げます。

▶ 植物資料 ◀

たかねのはな 「高山植物」

本館所蔵の植物標本約2,000点のうち、600点が高山植物である。高山植物とは高山に生活の根拠をおく植物のことである。つまりハイカーの靴にくっついて高山に紛れ込んだタンポポは高山植物ではないし、単身赴任のようにして郊外の涼風通う岩場に咲く高山の花は高山植物である。

次にどの山が高山になるのであろうか、高山帯とは森林がとぎれ視界が広がるあたりからである。中部地方では標高2,500m、東北地方では1,900m以上が高山帯になる。しかし本県のように冬期の厳しい気候を有する裏日本では、およそ1,500mから高山の標相を呈している。この部分は偽高山帯とよばれ、ここからが高山植物の本拠になる。

可憐な花、高山植物を誰しもが我が庭に咲かせようと思うものである。極地でさえ生育するのだから、平地では益々元気に育つはずである。高山の気温は盛夏でも平地の早春程度であるが、日射は平地のそれを下回ることはない。そこに育つ植物を平地に移植した場合、光合成量はあまり変わらないが、高温のため呼吸量は著しく増大する。特に夜間は高山のように低温にならないため1日のエネルギー消費はかなりの量になり、日昼の光合成はそれを補いきれず夏バテ気味になってしまう。高山植物にとって長く辛い夏がやっとう過ぎ、平地植物は休業に入るが、耐寒性の高山植物はそうもゆかず、過労が重なり歳々度々細ってゆく結果となる。

高山植物はやはり高嶺の花のようである。

- 注：(1) 太陽光からのエネルギー取り入れ
(2) 生活のためのエネルギー消費

(附風博物館・山崎 裕)

昭和61年度
公開講座・特別展を終えて

公開講座「水と文化」

今年度の公開講座は、我々の生活とは切り離すことのできない「水」そして、それにかかわる「文化」を自然科学・人文科学の両面から探ったものであり、山形市内にとどまらず遠距離からの受講者も多く、熱心な講義が展開されました。

講義科目及び講師

回 月 日	講義科目	時間	官職氏名
第 1 回 9月20日	開講式	30分	
	水の科学概論	120	理学部教授 大津 高
	最上川の自然的特性と人間生活	・	教育学部教授 加藤 武雄
第 2 回 9月27日	降水の機構と水の利用	・	農学部教授 羽根田栄四郎
	水と日本古代文学	・	人文学部教授 後藤 利雄
第 3 回 10月4日	せせらぎと共に	・	工学部助手 横山 孝男
	水と寄生虫	・	医学部助教授 斎藤 奨
第 4 回 10月11日	河川交通の歴史(1)	・	教育学部教授 横山 昭男
	・ (2)	・	・
第 5 回 10月18日	「酒」について	・	理学部教授 安部 守
	生息動物による水質評価	・	理学部教授 大津 高
	終了式	30	

特別展「水と文化」

公開講座「水と文化」の延長として開催された本展は、講座の内容を実際の資料を用い広く一般に紹介したもので、本県河川の持つ特徴を各視点から広角的に眺め、水と人間の関わりを「酒造り」を例にとり各方面から展示しました。

1. 期間 昭和61年11月4日(火)から14日(金)まで

2. 内 容

- 第1展示「水と山形県」
- 最上川の自然的特性 (写真) 火焔滝から出羽大橋まで
 - (図表) 最上川流域全国、最上川水系略図ほか
 - 生息動物による水質評価 (図表) 山形県の河川水質図、指標生物図ほか (指標生物標本) 12点
 - 最上川・河川交通の歴史 流路の変化を示す給図・地図、写真に見る戦前の最上川、川船関係資料、河川交通資料ほか
- 第2展示「水と人間」——「酒と水」の文化
- 造り酒屋資料 (酒林ほか)、清酒のできるまで (VTR)、昔の酒造り道具 (45点)、酒造工程模型「昔の酒造り」、醸造用地下水、酒造米、麹カビと酵母菌(顕微鏡下観察)ほか

昭和61年度学芸員資格取得のための博物館実習実習実施者

学 部	履修者数	合 計
人文学部	45	71 人
教育学部	5	
理学部	21	

昭和60年度見学者総数

一般成人	個人	357 (人)
	団体	40
大 学 生	個人	212
	団体	474
児 童 生 徒	個人	3
	団体	34
合 計	個人	572
	団体	548
	総数	1,120

山形大学附属博物館 613 1967. 3. 1 発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
(〒990) 山形市小白川町1丁目4-12
☎0236-31-1421 (内) 2921